



仏典以前

荒木 功

せんだって編集委員より、本欄に何か書くようにとの依頼を受けた。しかし私は仏教学や宗教学、さらに宗教社会学を専攻するものでも、仏教や宗教一般にも殊に深い関わりがあるものでもない。それゆえ、「仏典を読む」と題して書くような立場にもなく能力もないため、とりあえず仏典や仏教以前に、私の記憶をたどって漠然と広い意味で「宗教的なもの」と私との関係らしいものを述べるにとどめておきたい。

さて私は幼稚園（キリスト教系）に通っていた時以外には宗教教育も宗教的雰囲気もない公立の学校で、宗教的なものへの関心も殆どなくこれまで過してきた。ただ大学の教養時代、「哲学」の講義で東洋思想に触れられたのを契機に、何気なく「浄土三部経」、「無門関」、

「般若心経」その他の経典を読んでみた記憶がある。また学部でも「比較思想」のテキストとしてR・N・ペラの『日本近代化と宗教倫理』などを読み、近代化と宗教（「宗教的なもの」というテーマに興味を抱いた。しかし、何れにせよ基本的には、ある意味での「教養」や「知識」あるいは「思想」として見ていたに過ぎない。つまり、私にとって「宗教的なもの」とは、人間の「知」を構成するある種の精神内容であり、また、そうしたものとして日常生活世界における人々の思考や行動に関わるものであった。さらにまた私のそれらへの関係は、経験的に把握し得るはずの「対象」として関心を抱くことであった。確かにこうした対象化や関係のしかたについては、「宗教」の内在的観点からすれば、その非本質



的、外面的、周辺の側面を抽象したものに過ぎないと言われよう。そのうえそうした態度は、主客を立て、言葉を紹介して両者を引き裂き、解釈し説明する分析の立場にしかも極めてプリミティブな形で安住するに過ぎないものともみなされよう。それにしても何故私は「引き裂く」ことにそれほどまで呪縛されているのであろうか。いわば「引き裂く」ことを運命とする（分別）知への執着は、一体どこからやってくるのであろうか。私には全く知るよしもない。ただ、奇妙なことに私の中には、そうした執着を肯定する気持と否定する気持とが共在している事実である。

そんな私にも、もう一方では青春の常として、自己のレーゾン・デートルや生死の意味を見いだしたい思いと、それなりの煩悶がなかったわけではない。むしろ、「対象（自己をも含めて）」の合理的な分析や説明より、生身の人間、トータルな存在として自らを確認したいという思いこそ、私の心で大きな比重を占めていた。

その頃、友人から宗教研究・実践団体「FAS」の事を聞き、とある夏の日その研究会が持たれた妙心寺霊雲院の扉を叩いた。研究会と云っても、七日の間参加者と一日三度の打座と寝食を共にするものであった。その日々は、既に記憶の外にあるが、ただ私の耳底には、書かれた「般若心経」が誦和されると一変して生きた音の塊としてうねり、反復する「ム」音が木霊となつて響いた

印象が今も残っている。因に、中村元・紀野一義訳註『般若心経・金剛般若経』（岩波文庫）を繙いてみると、所収の玄奘による漢訳本文二六二二字中、「ム（無）」音は一九字を数え、全文を四拍子のリズムが貫いている様に見える。

問題は、音楽的形式ではなく、読誦の「エコノミー」と論述形式が融合し、アイデアルな存在がリアルな存在に転化する際の極限的な姿が示されていないかと云う点である。また、「ム」音もむろん「無」であり、「不」と共にアイデアルな世界で高邁な意味を担う事は、改めて述べるまでもない。ただ、リアルな世界でも、それが大きな意味を持っているのではないかと思っただけである。それは先づ、唇音のmはnなどと共に人間が最初に発する言葉（「マンマ」など）に現われ、更に、人間の極めて自覚的な態度を表示する《否定》語（邦語のナイヤム、英語のno、梵語のnaなど）として再現して来るのである。私には、それらの音が意識前と意識、無と有の世界を媒介する根元的な響きをもつ音に思えてならない。

私は、身の程も知らず卑小な言葉をただただ連ねて来た。だが、それは否定されるべきヴィジュニャーナの範囲を到底出る事はなく、般若波羅密多は遙か彼方にあると見えない。偉大なる師の教導を只管請い願うばかりである。

（あらかき いさお・社会学部講師）